

ツヴァイク全集

15

エラスムスの
勝利と悲劇

一雄 啓
雄 淳
恵 垣
田 本
猿 藤
内
訳

みすず書房

エラスムスの勝利と悲劇

内垣啓一
藤本淳雄 訳
猿田 恵



みすず書房

ツヴァイク全集 15
エラスムスの勝利と悲劇

内垣啓一
藤本淳雄
猿田 憲
共訳

1974年12月24日 印刷
1975年1月10日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 東京(03)814-0131(代表) 振替 東京 195132

本文印刷所 理想社印刷所

扉・カバー・表紙印刷所 栗田印刷

口絵印刷所 京美印刷

製本所 鈴木製本所

©1975 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan

書籍コード 0397-00151-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

エラスムスの勝利と悲劇	5
-------------	---

使命と人生の意味	7
----------	---

時代への展望	23
--------	----

暗い青春	29
------	----

肖像	51
----	----

巨匠時代	65
------	----

人文主義の偉大と限界	84
------------	----

偉大な相手	110
独立のための闘争	146
偉大な対決	167
最 期	189
エラスムスの遺産	205
世界大戦中の発言	211
不眠の世界	213
うれい知らぬ人びとのもとで	223
ベルタ・フォン・ズットナー	235

ヨーロッパの心 250

砲 火 272

ヨーロッパ思想の歴史的発展 291

訳者のことば 329

エラスムスの勝利と悲劇

内垣啓一 訳

余はロツテルダムのエラスムスが、かの党派に加わりおるや否やを、聞いただとさんと努めた。しかるに、或る商人の答えていわく、「えらすむすハ自立ノ人（ホモ・プロ・セ）デアリマス」と。

——『無名士書簡集』（一五二五年）より——

使命と人生の意味

ロッテルダムのエラスムスと言えば、かつてはその世紀の最も偉大で最も輝かしい名声の持主であったのに、今日ではもはやほとんど一つの名前以上のものではない。忘れさられた超国民的言語、あの人文主義風ラテン語で綴られた彼の無数の著作は、ほうぼうの図書館のなかで妨げられることのない眠りをむさぼっている。かつては世界的な名声を博したそれらのどれ一つとして、今日なおわれわれの時代に向かって語りかけるものはまれである。彼の人物像もまたとらえがたく、微光と矛盾のうちにちらついているために、他の世界改革者たちの、より力強く激しい形姿によってひどく陰らされているし、その私生活についても、あまり楽しい話題を伝えることはできない。およそ静寂と不断の労作の人がセンセーショナルな伝記を生むことは、めつたにないのである。だが現代の意識にとっては、彼本来の行為までも、すでに落成した建物のしたの礎石がつねにそうであるように、埋没し隠蔽されてしまっている。だからまず明確に、要約して言うておくべきであろう——この偉大な忘れられた人、ロッテルダムのエラスムスを今日なお、いや今

日こそ、われわれにとって貴重な存在にするゆえんのもの、すなわち彼が西欧のすべての著作家や創作家のなかで最初の自覚したヨーロッパ人、最初の戦闘的な平和愛好者であり、人道主義的（ヒューマニズム）な理想、世界と精神を友とする理想のための最も雄弁な代言者であったということを。さらに、彼がわれわれの精神的世界の、より公正で和解的な形成のための闘争にあたって、つねに敗北の人でありつづけたということを。この悲劇的な運命こそ、彼をひとしお身ぢかにわれわれの同胞感情に結びあわせるものなのである。エラスムスは、われわれがいま愛している多くのものを愛していた——詩歌と哲学を、書物と芸術作品を、諸言語と諸民族を、またそれらすべてのあいだの差別を問わずに全人類を、より高い人倫化という課題のために愛していた。そして彼は地上のただ一つのことを、理性の仇敵として心から憎んでいた——狂信である。みずからすべての人間のなかで最も非狂信的であり、おそらく最高位とは言えないとしても最も広い知識を持つ精神であり、文字どおり人を酔わせる慈善ではないにしても誠実な善意の心情であったエラスムスは、あらゆる形式の不寛容な志向のうちに、われわれの世界の禍根を見ていた。彼の確信によれば、人間のあいだ、諸民族のあいだの葛藤のほとんどすべては、しょせんみな人間的な領域に属するものである以上、おたがいの譲歩さえあれば無理のない解決ができるはずであった。ほとんどどの抗争も、つねにあて馬ややじ馬たちが戦闘的な弓を引きしほりすぎることがなければ、比較的穩便に調停されるはずであった。それゆえ彼は宗教的、国家的、世界観的分野の別なく、およそ

狂信と名のつくものに対しては、これをあらゆる和解の不俱戴天の破壊者と見なして戦ったのである。彼は、たとえ僧衣に身を包もうと教授のガウンに身を包もうと、強情な連中、かた寄った考え方をする連中、どの階級にせよどの人種にせよ、馬車馬的偏見の思想家たち、狂信者たちのすべてを憎んでいた。この連中はどこでもかまわず、自分の意見に対しては絶対服従を要求し、あらゆる別なものの見方を、異端とか破廉恥とかと輕蔑して呼ぶのである。みずからは誰にも自分の見解を強いようとはしなかっただけに、彼は何らかの宗教的もしくは政治的な信条を押しつけられることには、断乎として抵抗した。思考の自立性は彼にとって、自明なことであった。そしてこの自由な精神は、説教台と講壇とを問わず、誰かが立ちあがってその個人的な真理を、まるで神がその人の、その人だけの耳に語りかけた告知であるかのように述べるとき、つねに世界の神的な多様性が萎縮させられるのを見たのである。それゆえ彼は、電光石火のようなその知性の全力を傾けて、自分の妄想に酔いしれる独りよがりな狂信者たちに対して、生涯を通してすべての分野で戦いつづけた——そしてきわめてまれに訪れる幸福な時間にだけ、彼らに向かって微笑みかけたのである。そのような比較のおだやかな瞬間には、額の狭い狂信もただ憐れむべき精神の偏屈、彼がその幾百の変種や珍種を『痴愚礼讃』のうちにあれほど愉快に分類し茶化した「痴愚女神（ストウルティティス）」の無数の形態の一つ、と思われたのである。真に偏見のない公正の人であった彼は、どんなにいきり立つ敵にも理解と憐憫を持った。だが心の奥底でエラ

スミスがつねに知っていたのは、人間の天性に巢食うこの厄神、つまり狂信がやがて、よりおだやかな自分の世界と自分の人生とを破壊するであろうということであった。

なぜなら、エラスムスの使命と人生の意味は、さまざまな対立を人道性ヒューマニティの精神のうちに調和的に包括することだったからである。彼は結合させる天性、あるいは、すべての極端を拒否する点で彼に似ていたゲーテの言葉を借りるならば、「連帶的な天性」であつた。あらゆる暴力的な転覆、あらゆる「騒乱（トゥムルトゥス）」、あらゆる暗鬱な大衆争議も、彼の感情からすれば、自分とその忠実で静粛な使徒として義務を感じていた世界理性の、明晰な本質に反するものであつた。そしてとりわけ戦争は、内面的な対立を調停するための最も粗暴で、最も暴力的な形式であるという理由から、道徳的に思考する人類とは一致しがたいように思われたのである。葛藤を善意の理解によって和らげ、暗雲を晴らし、もつれを解きほぐし、ほつれを新たに織りあわせ、分裂にはより高い共通な関連を与えるまねな技術が、彼の忍耐づよい天才の本来の力であつた。そして同時代の人々は感謝をこめて、この多方面に活動する和解への意志を、端的に「エラスムス流」と呼んだ。この「エラスムス流」に、この一人の男が世界をなびかせようとしたのである。

みずからのうちにすべての形式の創造性を統一し、詩人、文献学者、神学者、教育者を一身に兼ねていた彼は、宇宙全体についても、見たところ宥和しがたいものの結合が可能であると見なし、ていた。彼の仲介術からすればおよそいかなる領域も、手が届かなかったり、無縁であつたりす

るものはなかったのである。エラスムスにとっては、イエスとソクラテス、キリスト教の教義と西洋古代の叡智、敬虔と人倫のあいだに、越えがたい道徳的な対立は何ひとつ成立しなかった。

彼はみずから聖別された司祭でありながら、異教徒たちを寛容の^{トランス}気持からその精神の天国へ受け

いれ、兄弟のように神父たちのそばに立たせた。哲学は彼にとって神学とは別な、だが等しく純

粋な、神を求める形式であつた。彼がキリスト教の天国を仰ぐ信仰の念は、ギリシアのオリュン

ポスの山に対する感謝の眼に劣らなかつた。官能の悦びに充溢したルネサンスも彼の眼には、カ

ルヴァンその他の狂熱者たちが見たような宗教改革の敵ではなく、そのより自由な姉妹と映つた

のである。いかなる国にも定住せず、しかもすべての国に安住した、最初の自覚した世界市民で

あり同時にヨーロッパ人であつた彼は、或る国民の他の国民に対するいかなる優越も認めなかつ

た。そして彼は諸民族をひたすらその最も高貴で最も形式を具えた精神たち、すなわちその選良

たちによって評価するように、自分の心情を育てていたので、すべての民族を愛するに価する

ものと思つていた。ところで、すべての国土、人種、階級出身のこれら善意の者たちを招集して、

教養人の一大同盟にするという崇高な試みを、彼は生涯の本来の目標としてひき受け、諸言語を

超越した言語であるラテン語を高めて、新たな芸術形式と和解の言語に変えることによって、彼

はヨーロッパの諸民族のために——忘れられない行為ではないか——一紀元のあいだ持続するよ

うな、超国民的に統一された思考と表現の形式を創りだしたのである。彼の広い知識は感謝の眼

で過去をふり返り、彼の信仰する心は信頼に満ちて未来を眺めやった。だが彼は、神の計画を浅はかな悪意のうちに執拗な敵意によって再三かき乱そうとするこの世の野蠻さは、辛抱づくよく見すごした。ただ高次の、形式を与え、かつ創造的である領域だけが、彼を兄弟のように引きよせ、そして彼があらゆる精神的人間の課題と見なしていたのは、この空間を押しひろげて、いつしかそれが天国の光のようにあまねく清く、人類全体を包むようになることであつた。というのも、この初期人文主義の最も内的な信仰（しかも、美しく悲劇的な錯誤）とは、こうである——エラスムスおよびその仲間たちは、啓蒙による人類の進歩を可能と見なし、教養、文学、研究、そして書物がさらに一般に普及すれば、個人ならびに全員の教化も可能であると期待していた。これらの初期理想主義者たちは、学習と読書を辛抱づくよく育成することによって、人間の天性は陶冶しうるということに、涙ぐましい、ほとんど宗教的な信頼を抱いていた。書物を信じる学者であつたエラスムスは、人倫的なものが完全に教えうる、そして学びうるということを、およそ疑わなかつた。また人生を完全に調和化するという問題も、彼が間ちかに夢みていたこの人類の人道化によって、はやくも保証されたものと思われていたのである。

このような高邁な夢はさながら強力な磁石のように、すべての国々から時代の最良の者たちを引きよせるのに適していた。個人である自分の願望と活動によってでも、世界を普遍人倫化することに何らかの寄与をはたしうるのだ、という慰めになる思想、魂を押しひろげる妄想がなければ

ば、たとえ倫理感を具えた人間であっても、かならず自分の存在が取るにもたりない、うつろなものに思えてくることであろう。つまり、われわれの現在はいより高い完成への段階にすぎず、はるかに完全な生命の過程への準備にすぎない、という考えなのである。人類の人倫的な進歩に寄せるこの希望の力を、或る新しい理想によって信仰に変えるすべを心得ている者は、その世代の指導者となる。エラスムスがそうであった。時あたかも、人道性の精神のうちにヨーロッパの統合をはかる彼の思想にとつて、またとなく有利であった。というのも、十五世紀から十六世紀の転換期になされたさまざまな偉大な発見と發明、ルネサンスによる学芸の革新は、久かたぶりに全ヨーロッパを幸福感で満たした超国民的な集団体験だったからである。数えきれない抑圧された年月ののちにはじめて、西欧的世界はふたたびその使命への信頼によって生気をとり戻し、すべての国々からは最良の理想主義勢力が、人文主義にむかつてなだれ寄せた。誰もがこの教養の帝国の市民に、世界市民になろうとした。皇帝と教皇、領主と司祭、芸術家と政治家、青年と女性、競って諸学芸の授業を受けようとし、ラテン語は彼らの共通の同胞語、精神の最初のエスペラントになった。ローマ文明の崩壊以来はじめて——この行為を讃えようではないか——エラスムスの学者共和国によって、ふたたび共通のヨーロッパ文化が生まれ始め、或る一国民の虚栄ではなく全人類の福祉がはじめて、理想主義のもとに同胞として集まった者たちの目標となったのである。そして、精神のうちに結合されることを望む精神的な人々のこの欲求、超国語のうち

に和解しあうことを望む諸國語のこの欲求、超國民的なもののうちに決定的な平和を得ることを望む諸國民のこの欲求、理性のこの勝利はまたエラスムスの勝利でもあり、彼の神聖な、だが短くはない一紀元でもあった。

なぜ——これは悲痛な問いである——あれほど純粹な帝國が、存続できなかったのだろうか。なぜほかならぬあの、精神的な和解という高邁で人道的な理想が、なぜあの「エラスムス流」が、今ではとうにすべての敵意の背理を教えられているはずの人類のうちに、あいも変らずかくも現実的な力を持てないでいるのだろうか。残念ながらわれわれははっきりと認識し、告白しなければならぬ——ひたすら普遍的な福祉しか眼中に置いていないような理想は、およそ広範な大衆を完全に満足させることはないのである。平均値的な天性の持主たちの場合、單なる愛情の暴力と並んで、憎悪もまたその陰湿な權利を要求し、個人の持つ利己心は、いかなる理想からも性急な個人的利得を欲するのである。大衆にとってはつねに具體的なもの、把握しうるもののほうが、抽象的なものよりも受けいれやすいであろう。それゆえに、政治の世界で最もたやすく傾倒者を得るスローガンとは、理想のかわりに敵対關係を、他の階級、他の人種、他の宗教に逆らうようなたやすく把握できる手輕な対立を、宣言するものであるだろう。なぜなら、狂信がその無法な焰を最も燃えたたせることができるのは、憎悪によってだからである。それに反してエラスムス流の理想のように單に結合を求める、超國民的で汎人道的な理想は、戰鬪的に相手の眼を見つめ